

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月31日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21330158

研究課題名（和文） 臨床心理学初学者のための家族療法（システムック療法）教育プログラムの構築

研究課題名（英文） Educational Program of Systemic Family Therapy for beginner in clinical psychology

研究代表者

中釜 洋子 (Hiroko Nakagama)

東京大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：40272489

研究成果の概要（和文）：

家族システムック療法について、わが国の臨床心理士は、どのような職業的ニーズから、また、どんな経路を辿って学びの途に着くかが英国の教育トレーニング制度との比較によって調査・研究された。その結果、①ロールプレイを用いた実践的経験、②家族療法に対する初期印象の影響力の強さ、③ 個人心理療法との共通点や他の家族療法流派との類似性を重視した学び（など）が、臨床心理学初学者の教育プログラムにとって重要であることが見出された。

研究成果の概要（英文）：

We here investigated what could be the motivation or professional needs for clinical psychologists to receive educational program of Systemic Family Therapy. Research for the process had been constructed in our country by comparison of the educational training system conducted in the United Kingdom.

We concluded that the following factors are important (essential) for the education program for beginners in clinical psychology. Namely, ① Experiencing practical learning through role-play therapies, ② the impact of the initial impression on individual beginners and its continuing effect on their own aspects for family therapy, ③ learning of what could be the similarity or common factors between individual therapy and other approaches to family therapy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2010年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	6,000,000	1,800,000	7,800,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学 3903

キーワード：臨床心理士教育研修、家族システム療法、家族合同面接、ロールプレイ、実践トレーニング、教育研修プログラム

1. 研究開始当初の背景

昨今、育児不安や児童虐待等は一方向に減らず、夫婦間暴力や高齢者・障害児者のケアにまつわる臨床的問題がますます盛んに取り沙汰される等、わが国の家族の養育機能の低下が問題視されるようになって久しい。家族が抱える心理的問題の適切な手当てのために、家族志向（関係志向）の心理援助の方法論の確立と専門家養成は、ニーズが高い課題であるにも関わらず、教育機会・実践提供の場とともに、十分である状況には全くない。

家族システム療法の教え方、学び方を整備することは現代日本の臨床心理学にとって急務と考えられることから、本研究を計画するに至った。

2. 研究の目的

実際の人間関係に直接・間接に **here & now** で働きかけるほほ唯一と言っている心理療法理論である家族システム療法について、効果的な教え方・学び方を探求し、実効性のある教育プログラムづくりの提言へとまとめることが研究の目的である。

具体的には、①海外のプログラムを参照しつつもわが国の家族や親密な人間関係の独自性を反映した教育プログラムが提案されること、②臨床心理学初学者とある程度臨床経験を積んだ学習者の二群に分けた提案にするという2点にまとめられる。

3. 研究の方法

具体的には、4つの研究テーマに分けて研究を推進した。〈研究1：諸外国の教育研修システムの視察〉〈研究2：経験者は家族システム療法や合同面接の学びにいかに入力し、どのように経験するか〉〈研究3：合同面接（カップルセラピー）のプロセス研究〉〈研究4：初学者は家族システム療法や合同面接をどのように経験するか〉の4つである。

それぞれの研究に相応しい研究協力者を得て、協力者とともに同時進行的に研究を押し進めた。最後に4つの研究の結果を併せて考察し、家族システム療法の実効性の高い学び方についての提言としてまとめた。

具体的な研究法は、研究1が視察、研究2は質問紙法と面接法、研究3は臨床経験5年以上の6名によるロールプレイ面接を用いた実験、研究4は0～4年の初学者による実験によった。

4. 研究成果

研究の方法に述べたように、研究は4つのテーマに分けて行われた。研究成果には、まずは研究1～4にわけてそれぞれの成果を述べ、その後に総合考察を述べることとする。

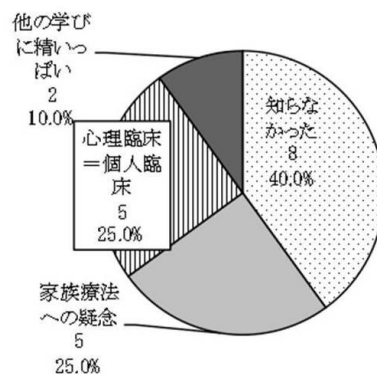
(1) 研究1：英国の教育研修システムの視察：

保険制度が類似しているなどの理由から、援助専門職の資格制度が折々に紹介されてきたイギリスの臨床心理学事情であるが、家族療法（システム療法）に関しては、その限りでないという理由から、今回の視察先とした。システムセラピスト資格、SVor資格とも国を挙げて数年前に整備されたところであり、わが国の家族システム療法のひろがりに比較すると、①教育訓練に費やす年月と請け負う仕事がどれほど特化されたものであるか、あるいは広範な援助活動に属すかの違いにより、システム実践家とシステムセラピストと呼ぶ二種類の資格が整備されている、②それゆえ、他のディシプリンに拠って立つ専門家の間でも、システム的なものの見方とそれに基づく介入法は、周知のものとなり対人援助職が身につけるべき有用な視点として広範に知られ、根付いている、③特定のアプローチに偏らず、統合的視点にたった学びが推奨されている、などが特徴として抽出された。

(2) 研究2：経験者は家族システム療法や合同面接の学びにいかに入力し、どのように経験するかの研究：

統合的家族療法の教育研修を謳う心理療法研究所が開講した理論講座受講者の協力

図1



を得て、臨床心理学の既習者がどのような経路を辿って家族システム療法の学びに入り、合同面接をいかに体験するかが探求された。受講事前・事後のアンケート調査によって全体傾向を捉えた上で、そのうちの15名を対象に半構造化面接を行い、合議制質的研究法に基づき学びに至る経緯に焦点づけて代表的なタイプを抽出した。

これまで学ぼうと思わなかった理由(図1)、関心を持ったきっかけ(図2)、今回特に受講に至るほど関心を抱いたきっかけ(図3)はそれぞれ以下に示した通りである。

図2

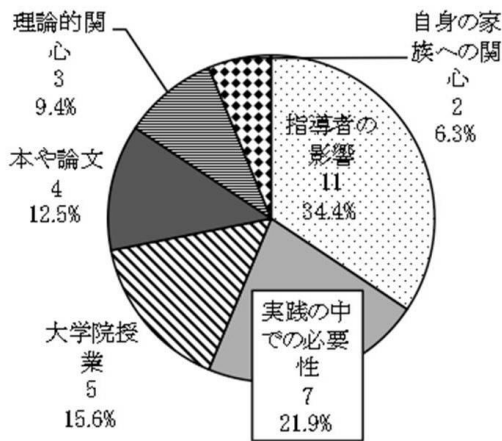
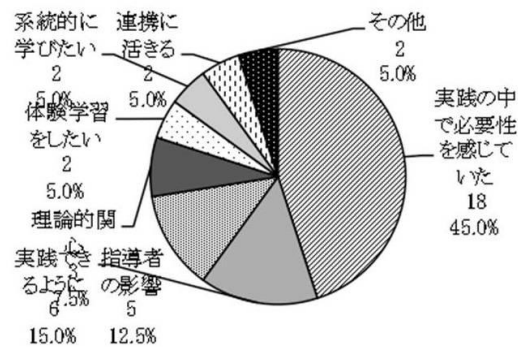


図3



15名を対象にしたインタビュー調査からは、次の3つのタイプが抽出された。

Type1: 臨床経験が長く家族療法に触れ、奇を衒ったような介入法や操作性に関心を抱くより抵抗を覚えた。そのため、これまで学ぶ機会を逃してきたタイプ

Type2: 臨床経験は短い者から長い者まで多様で、ごく初期の大学院教育の時代から教員の影響により家族療法に好印象を抱き、機会があれば学びたいと考えていたタイプ

Type3: 家族療法への印象はニュートラル、あくまで実践のなかで家族と会うことが必

至、学ぶ要請があると考えたタイプである。

Type2からは、院における基礎研修の時期に学びのモチベーションはすでに形成されている可能性が伺える。Type3は、英国のシステム実践家が辿る経路に相当する。わが国においても、現場からシステム的な学びに入ってくる人々が少なくないこと、彼らのニーズにしっかり応える必要があることが示されたと言えよう。すべてのTypeがロールプレイをこれまで経験したことがないルートによる学習機会と捉え、実際、多くの面接スキルと手がかりを学んだと報告した。

(3) 研究3: カップル・セラピーのプロセス研究

家族臨床の経験を持つ臨床経験6年から30年の臨床心理士6名によって研究グループが構成された。ロールプレイによるカップル・セラピー(夫が中程度の秘密を持つ関係形成期のカップル)の初回面接に対しIPR(Interpersonal process recall)を実施して得られた質的データを、合議制質的研究法を用いて分析する一連の経過から、研究グループのメンバーはそれぞれ、臨床経験の違いに関わらず大いに刺激され、臨床上役立つ関係づくり、面接の指針にまつわる手がかりを得ることができた。

たとえば、初回面接により受け身的に連れて来られる側の夫の体験は、すべてのロールプレイで妻のそれより複雑かつ不安なものであることが示されていた。一見、セラピストを拒否するような言動を示すものの、同時に妻と同程度かそれ以上にセラピストによって支持されること、肩を持ってもらいたいという欲求を持つことが示され、とりわけセラピストが初回面接以前に手に入れたカップルについての情報を示すことの重要性が指摘された。夫婦とセラピストの体験する「面接の経過を決定する重要な瞬間」は容易に重ならず、それにもかかわらず、ほっと肩の力が抜けるような主訴と直接は関わらないどちらかというカップルの関係のよさを髣髴するような話題が語られるとき、カップルのいずれもが救われるという肯定的印象をセラピストと面接について持つことが明らかとなった。肯定的話題を、カップルの来談意図と直接の関わりがなくても活用する意義が示されたと言える。

クライアントカップルの体験カテゴリにセラピストの体験カテゴリを加えたデータが作成され、「セラピストはカップルセラピーの初回面接でどのような仕事をするとういのか」という本研究の最終的なりサーチクエストンに基づいて合議した結果、以下の4項目がカップルセラピーの臨床的知見として抽出された。

すなわち、

- ① ニーズも動機もまちまちなカップルとの関係形成期に、肩を持つことの重要性
- ② カップル関係のよさが引き出されるような話題を探し、面接に導入する
- ③ パートナーの発言に相互が脅かされるのではなく、相互に理解が増し合うような支援に力を尽くすこと
- ④ 発言された内容のみならず、実際には発言されない言葉も多く、それらがあることを前提とし、どんな言葉が呑み込まれたかについて、思いを馳せるような関わりが重要である。

(4) 研究 4：臨床心理学初学者を対象とする
ロールプレイによる家族療法の学びにつ
いての研究

臨床経験 0～5 年の初学者によって構成された研究グループがそれぞれの関心にに基づき、5つのロールプレイを用いた研究が実施した。研究 3 同様、ロールプレイを実施し、その体験を集団で振り返ることは、家族システム療法での学びとして極めて有効なことが示されたが、それはとりわけクライアント家族のロールを取ることに生じる気づきであることが多く、セラピストロールを取ることは初心者には荷が重く自身のない経験になる瞬間もしばしば認められた。

初学者とのロールプレイは、なるべく細かくフィードバックしながら、それが緊張を高めるのではなくほぐす役割を果たすこと、上手くゆかないやりとりも含めて楽しめるという文脈で実施することの重要性が示された。

初学者にとっては、個人面接とカップル面接、家族合同面接の 3 種は真っ先に違いを大きく感じるもので、その差が大きすぎないものとして呈示され説明される経験によって、表面的違いに引きずられない共通性を感じ取る体験がもたらされるようであった。

(5) 総合考察：

4 つの研究から、以下の提言が導き出された。①ロールプレイなどを素材にした実践的学びを繰り返し行う方法が有意義であり、そのことは初心であれ経験者であれ変わらず当てはまる。②初心の時期に、家族療法への肯定的イメージが形成されることが望ましく、後のトレーニング意欲はそこから醸成される。肯定的イメージは、教師から直接に与えられる、その時期に学んでいた他のアプローチとの齟齬があまり大きくないこと、操作性があまり高くないことから生み出される。③家庭裁判所調査官、児童相談所相談員、小中学校教師などは、その仕事の性格上、家族と関わるのが欠かせない。臨床経験を積むなかで、家族システム療法を学ぶ必要をますます強く感じるようになるという流れ

がある。このニーズに応えるため、早急にシステム実践家に学びのルートを整えることが急務である。④初学者にとっては特に統合的学びが推奨される。統合的学びとは、あまり多くの技法を導入することなく、ベーシックな概念だけを用いて、個人療法に対して、家族療法諸理論に対して、共通性に関われる形で習得するのが望ましいと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- ① 中釜洋子、臨床実践のなかで家族はどのように扱われるか、精神医療、65、査読なし、2011、31-38
- ② 藤田博康、田附あえか、大塚斉、平木典子、中釜洋子、イギリスの家族/システム療法家教育・訓練システムに学ぶ、家族心理学年報 29、査読有、金子書房、2011、104-119
- ③ 中釜洋子、家族面接としての家族療法、臨床心理学、10 巻、査読なし、2010、854-859
- ④ 中釜洋子ほか、特集：家族のための心理援助を考える シリーズ 1 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要、32、査読なし、2009、201-224
- ⑤ 中釜洋子、保護者とどう付き合うか：家族臨床の視点から 子どもの心と学校臨床、1 巻、査読なし、2009、23-34

〔学会発表〕(計 11 件)

- ① 中釜洋子、関係ネットワークへの統合的アプローチ、日本子ども健康科学学会学術大会 13 回、跡見学園女子大学、2011. 12. 17.
- ② ～④ 田附あえか、大塚斉、藤田博康、中釜洋子、平木典子、わが国における統合的家族/システム療法援助実践の研修と課題(1)～(3)、日本心理臨床学会九州大学、2011. 9. 3.
- ⑤ ～⑦ 大町智久、大西真美、田附あえか、大塚斉、中釜洋子、カップル・セラピーのプロセス研究(1)～(3)、日本家族心理学会第 28 回大会、鹿児島女子短期大学、2011. 8. 28.
- ⑧ 中釜洋子、特別講演：不妊カップルの理解：文脈を読む、多世代を読む、日本生殖医療心理カウンセリング学会第 8 回大会、都市センターホテル、2011. 2. 6.
- ⑨ ～⑪ 藤田博康、大塚斉、田附あえか、中釜洋子、平木典子、イギリスの家族療法家養成・訓練システムに学ぶ(1)～(3)、日本家族心理学会第 27 回大会、子ども

の城（東京）、2010.8.21.

〔図書〕（計2件）

- ① 平木典子、中釜洋子、友田尋子、金子書房、親密な人間関係のための臨床心理学、2011、180
- ② 中釜洋子、東京大学出版会、個人療法と家族療法をつなぐ—関係系志向の実践的統合、2010、226

〔その他〕

- ① 平成21～23年度科学研究費補助金基盤（B）研究成果報告書：臨床心理学初学者のための家族療法（システムック療法）教育プログラムの構築、中釜洋子研究代表者、2012.3.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中釜 洋子 (Hiroko Nakagama)
東京大学大学院・教育学研究科・教授
研究者番号：40272489

(2) 研究分担者

藤田 博康 (Hiroyasu Fujita)
手塚山学院大学・人間文化学部・教授
研究者番号：80368381

平木 典子 (Noriko Hiraki)
IPI統合的心理療法研究所所長
研究者番号：50238870 (H21, 22)
(H21, 22→23：研究協力者)

(3) 研究協力者

田附 あえか (Aeka Tatsuki)
筑波大学
研究者番号：

大塚 斉 (Hitoshi Ootsuka)
武蔵野児童学園カウンセラー

ほか。